

(2) 父・丸山幹治 (1880～1955)

丸山幹治は1880(明治13)年に丸山鐵次郎・丸山としの長男として長野県埴科郡清野村大村で生まれた。松代町立松代尋常小学校卒業後、

「畑の仕事」に従事していたが、徳富蘇峰の『将来之日本』(1886年刊行)と『新日本之青年』(1887年刊行)を読んで感奮興起し、家出を決意する。

横浜で牛乳・新聞配達をしながら専門学校入学試



験受験資格を取得し、父の許しを得て東京専門学校(のちの早稲田大学)邦語科行政科に入学した(画像:丸山幹治の卒業証書<丸山彰氏所蔵>)。

1901(明治34)年の卒業後、陸羯南が社主を務めていた新聞『日本』を皮切りに、記者としての生活に入る。当時のジャーナリズムの世界は年功序列的要素が弱く、20代であっても見識と文筆の才があれば新聞の主筆になれる「縦のモビリティ」があり、なおかつ「自由に他社に移れる横のモビリティ」もあった時代である。校正に失敗して2か月で『日本』を解雇されたのち、『青森新聞』主筆、青森商業会議所書記長を経て1904(明治37)年に『日本』に再入社した。ここで幹治は古島一雄、三宅雪嶺、福本日南、国分青崖、長谷川如是閑、河東碧梧桐、安藤正純、千葉亀雄、井上亀六、古荘毅らと交わりを結ぶ。『日本』が陸羯南の手を離れると他の記者たちとともに退社し、幹治は朝鮮に渡って『京城日報』編集局長となった。

1909(明治42)年には『大阪朝日新聞』に入社して通信局長を務めるが、まもなく井上亀

六の異父妹である大庭セイと結婚し、1910(明治43)年には長男鐵雄が生まれた。このとき幹治は、喜びとともに悲しみを感じるという趣旨を日記に書きとめている。悲しみというのは、親としての責任を引き受けなければならなくなり、これまでのように自由な「モビリティ」(流動性)を謳歌できなくなったことから来るものであろう。

しかし、幹治にとって『大阪朝日新聞』は安住の地とならなかった。この時期の『大阪朝日新聞』は、幹治のほかに鳥居素川、長谷川如是閑、大山郁夫、櫛田民蔵、花田大五郎(比露思)、社友の河上肇、佐々木惣一といったそうそうたる執筆陣を擁し、民主化・自由化を求める潮流の旗手ともいうべき存在であった。ところが1918(大正7)年、米騒動に関連して白虹事件(『大阪朝日新聞』に対する言論弾圧事件)が起こると、鳥居らとともに幹治も退社を余儀なくされたのである。その後、東京に出て雑誌『我等』の同人となり、1919(大正8)年には『大正日日新聞』に入って関西に戻るが、翌年に同紙は解散してしまう。浪人時代を経て、1921(大正10)年には再び東京に移って『読売新聞』論説委員・経済部長、1924(大正13)年に『中外商業新報』(現在の『日本経済新聞』)論説委員・経済部長、1925(大正14)年に朝鮮へ単身赴任して『京城日報』主筆、1928(昭和3)年には『大阪毎日新聞』論説委員となり単身で関西に移った。

稼ぎ主である幹治がこのように不安定な境遇に置かれたことは、当然ながら丸山家に深刻な影響を与えた。『大阪朝日新聞』退社後は経済的苦境に陥り、さらに『京城日報』入社以後の幹治は年に数回帰ってくるだけとなった。セイは相当な苦勞を重ね、ほとんどひとりで4人の子を育てざるを得なかったのである。また、家庭での幹治は「実に横暴」だっ

たという。丸山はそこに、新聞紙上におけるリベラルなスタンスとのギャップを見出している。

幹治の記者人生における以上のような「モビリティ」と、その反面である不安定性は、逆説的ながら日本社会における組織化の進展と流動性の縮小という大きな流れによって増幅された面がある。ジャーナリズムの世界でもメディアの大企業化と寡占化が進み、ジャーナリストの同志的結合によっては太刀打ちできない状況となっていた。ジャーナリストも自分の主張や能力を評価してくれるメディアを渡り歩くのではなく、一つのメディアの中で出世することをめざすようになる。そこで評価される要素は学歴であった。幹治のような「ペン一本に生きる」タイプのジャーナリストが活躍する余地は狭まっていったのである。

それで親父はよく言っていた。日本の社会では帝大〔帝国大学〕を出れば、馬鹿でもある程度いく。帝大を出ていないということのために、どれだけ損するかわからない、実に下らないやつがただ帝大出ているというだけで黙ってどんどん出世していくというのだよ。だから僕らにお前たちは学校出たら、社会主義者になろうと、共産主義者になろうと、一切干渉しない、自分の好きな道をいってくれ、ただ学校だけは出てくれ、学校出ないと、日本では実際的に損するのだということを言いましたよ。それはよほどこたえているんだな。新聞みたいの比較的自由的な世界でもね。(「1月13日 丸山眞男先生速記録」)

丸山は、幹治の中に「学歴コンプレックスと帝大出身者への軽蔑とが入りまじった心

理」があったと指摘しているが、自分の子どもたちには時代の変化に逆らって苦勞してほしくないという親心があったことも確かであろう。4人の息子のうち上の3人は幹治のこ  
とば通り帝国大学を卒業し、末弟の邦男は父と同じ早稲田大学に進んだ。

幹治が自由に移動する記者人生を歩んだことは、セイや子どもたちに大きな負担をかけた一方で、かけがえのない生育環境を用意することにもなった。幹治は新聞『日本』や『大阪朝日新聞』を退社したのちもその記者仲間との親交を保ち、加えて『京城日報』の副島道正、『東京朝日新聞』の嘉治隆一、画家の柳瀬正夢、『読売新聞』の松山忠二郎らとも交わりを深めた。しかし、幹治の周囲にいた人々その思想的立場は一様ではなく、左に長谷川如是閑を中心とする『我等』（のちに『批判』と改題）の同人たち、右に井上亀六ら政教社の社員たちがおり、幹治はその中間という位置取りであった。「丸山幹治は自由主義者だなあ」と井上は笑いながら評していたという。このような人々に囲まれて育ったことが、丸山思想に奥行きを与えたといえよう。